幕末維新期における真宗護法論の研究
――超然と月性の排耶論を中心に――

岩田真美

本稿は、筆者が龍谷大学に提出した課程博士の学位申請論文の要旨である。同論文の目次に次いで、要旨を述べる。

序　論
第一章　真宗における護法思想・再考
はじめに
第一節　先行研究の検討
　第一項　「護法」という言説／第二項　「排仏論」と「護法論」
第二節　近世における真宗の護法思想
　第一項　三業惑乱と護法思想／第二項　近代真宗教学の形成と護法思想
第三節　幕末維新期における真宗の護法思想
　第一項　真宗教学と「他者」との出会い／第二項　真宗の護法思想と自他認識の転回
おわりに
第二章　超然の護法思想とその展開
はじめに
第一節　超然の生涯
第二節　三業惑乱と超然の護法思想
　第一項　『反正紀略』と超然の宗学研究法／第二項　『南柯法語』にみる超然の護法思想
第三節　『護法小品』にみる超然の護法思想
　第一項　『護法小品』の検討／第二項　『護法小品』に対する諸家の批評
第四節　幕末維新期における超然の排耶論
　第一項　『斥邪漫筆』の検討／第二項　『斥邪二筆』の検討／第三項　『寒更緻語』の検討
おわりに
第三章　幕末維新期の真宗排耶論―超然と月性を中心に―
はじめに
第一節　真宗における排耶論
　第一項　幕末維新期の排耶論／第二項　西本願寺の学林における排耶活動／第三項　真宗排耶論の特徴
第二節　超然と月性の排耶論
　第一項　超然と月性の出会い／第二項　『護法小品』の排耶思想／第三項　『仏法護国論』の排耶思想／第四項　超然の思想的影響
第三節　近代移行期の真宗思想と『仏法護国論』
　第一項　西本願寺と『仏法護国論』／第二項　真宗僧による民衆への教化
おわりに

第四章　月性の「護法意見封事」と『仏法護国論』
はじめに
第一節　月性の生涯
第二節　「護法意見封事」と『仏法護国論』との違い
第一項　『仏法護国論』において削除されている箇所／第二項『仏法護国論』において改編されている箇所
第三節　『仏法護国論』の改編をめぐって
第一項　『仏法護国論』の出版／第二項　月性の門弟たちの動向
おわりに
第五章　真宗の護法思想と真俗二諦の形成過程
はじめに
第一節　性海『真俗二諦十五門』にみる真俗二諦説
第二節　化政期の西本願寺と真俗二諦の形成過程
第三節　西本願寺の勤王路線と真俗二諦
第四節　幕末維新期の門主消息にみる真俗二諦の形成過程
おわりに
結　論
史　料
一　超然『時事小言』／二　月性『護法意見封事』／三　南溪『杞憂独言』

序論

本論文の第一の目的は、幕末維新期の真宗教学史の一断面として、超然と月性の排耶論を中心とした真宗護法論の研究を行い、それらが西本願寺教団や教学の動向にどのような影響を及ぼしたかを検証することである。第二の目的は、幕末維新期の排耶論を取り上げることで、真宗とキリスト教との接触が真宗教学に与えた影響を検証することである。

本論文の目的と動機の前提として、まずは近世仏教および近代仏教に関する先行研究を概観し、当該分野の先駆者たちが構築してきた学説や固定観念が近年の学界において塗り替えられつつある状況を指摘した。しかし、こうした研究動向の中で「近世から近代へ」の転換期にあたる幕末維新期の仏教思想が主題とされることは極めて少ない。さらに当該期の真宗教学史は、これまで殆ど研究が進められていない未開拓の領域である。このような問題意識に基づき、筆者は幕末維新期の真宗教学史研究を課題に設定した。特には、幕末から近代へと至る西本願寺の教団史・教学史の動向に多大な影響を及ぼしたとされる超然（一七九二～一八六八）と月性（一八一七～一八五八）の排耶論を中心とした真宗の護法思想の研究を行うこととした。幕末維新期の真宗と西洋のキリスト教との接触の意義を検討することは、真宗教学の近代化への過程を解明する上で看過できないと考える。

研究の方法として、従来の研究において排耶論は、キリスト教を排斥するという意味で「対外論争」として論じられてきたが、本研究では、これを真宗僧の「自他認識」という新たな視角から再考したい。幕末における西洋列強の東漸ならびにキリスト教の流入は、仏教側に「西洋」「キリスト教」という「他者」を認識させるとともに、真宗僧の「自己」（真宗）認識にも大きな変化をもたらして

いると考える。またその「自己」と「他者」に対する認識は幕末維新期という転換期の中で変化し続けており、その過程を自他認識の「転回」として捉えたい。さらに隣接する仏教史や思想史をはじめとする諸分野の最新の研究成果を取り入れ、幕末維新期における真宗排耶論の学際的研究を目指した。

第一章　真宗における護法思想・再考

本章は全体の総論にあたる。まず幕末維新期の護法思想に関する先行研究を検討し、これまで「護法思想」は「排仏思想」への対応として二項対立論で捉えられてきたことを指摘した。そして、真宗における護法思想の多様な側面に着目し、次の四点を提示した。

第一に護法思想は幕末期に排仏思想への対応として初めて生起したのではなく、西本願寺においてはすでに三業惑乱を契機として超然のように護法活動を行う僧侶が出現していることから、三業惑乱という教団内の法論も視野に入れる必要があること。第二に幕末期の護法思想が近代真宗教学の基本理念となった「真俗二諦」の形成と深く関わっていること。第三に幕末維新期における真宗護法論は排耶論（キリスト教批判）を特徴とし、その思想的枠組みの形成に月性の『仏法護国論』が影響を与えていること。第四に護法思想は近代の教団改革運動と密接に関わっていること。この四点を第二章から、一つずつ取り上げて検証した。

第二章　超然の護法思想とその展開

本章では、超然の三業惑乱後の著作から幕末以降に著した『斥邪漫筆』『斥邪二筆』『寒更叢語』などの排耶論を分析することによって、三業惑乱後から幕末維新期に至るまでの超然の護法思想の展開を教団教学の動向との関連の中で検討した。

超然は三業惑乱に関する著述を多く著しているが、とくに『反正紀略』は三業惑乱に関する膨大な史料を集めて作成されたものであり、後世の三業惑乱理解に多大な影響を与えた書物である。そこにはすでに歴史学的な方法論の導入がみられ、近代以降の真宗教学史研究につながるような側面があったのではないかと考えられる。

超然の著作を精査した結果、超然における「護法」の概念は、当初は三業帰命説という異義から真宗の教法を護るという意味で用いられていたが、その後は、三業惑乱後の教団体制の立て直しを意識するようになり、排仏思想の横行、キリスト教の流入などの対外的な危機から教団を護るという意味合いが次第に強くなっていったことが明らかになった。また幕末以降は、超然における「護法」とは「排耶」（キリスト教を排斥すること）によって教団を護るということと同義になっていく。それはキリスト教禁圧を使命としてきた江戸期の仏教教団にとって、幕末におけるキリスト教の流入は自己（仏教）の存在意義を揺るがす事態であり、護法＝排耶という認識につながったといえよう。さらに開国後には、超然は「護法」のために

本格的なキリスト教研究に着手するが、その過程でキリスト教という「他者」に対する認識は大きく変化していくこととなる。開国前はキリスト教について、人々の心を惑わす「邪教」という認識しか持っていなかったが、開国後には漢訳の聖書やキリスト教書を入手して、それらを吸収することで聖書の教理やカトリックとプロテスタントの違いにまで理解が及ぶようになっている。

第三章　幕末維新期の真宗排耶論
―超然と月性を中心に―

先行研究では、幕末維新期の仏教の排耶論は「護法・護国・防邪」の一体論をとり、その枠組みに最も大きな影響を与えたのが月性の『仏法護国論』であったと指摘される。本章では、月性の『仏法護国論』を取り上げ、超然が月性に与えた思想的影響や教団教学の動向を加味しながら、真宗における排耶論の形成過程を明らかにした。

まず以前からその類似性が指摘されてきた超然の『護法小品』と月性の『仏法護国論』との関係を再考した。超然は『護法小品』を出版する際、自身の護法思想の批評を、排仏思想を唱える儒学者らに依頼しており、「他者」の意見を聞くことで、いま真宗に求められていることを知ろうとしていた。その批評の中で儒学者たちに批判された点の一つは、超然の護法思想は国家を護ろうとする「護国」ではなく、仏教を護持せんとする「護法」に重点が置かれていることにあった。そして安政三年（一八五六）超然は、月性を西本願寺第二十世の広如に推挙し、月性に建白書「護法意見封事」を提出するように取り計らっており、建白書の作成には超然も関わっていたと推察される。その後、この建白書は『仏法護国論』と題されて出版されるが、本書においては上記の儒学者らの意見が反映されており、「皇国」と教団の危機に際して門末が一丸となって護国と護法に従事することが説かれ、仏教の果たす役割は防邪（キリスト教を防ぐこと）であることが明示された。すなわち西洋列強の日本進出に対して、仏教（真宗）を以てキリスト教を防ぎ、蓮如の「王法為本」「仁義為先」の「掟の文」を根拠として民衆を教化することで、真宗を護国に役立てようという主張がなされた。さらに『仏法護国論』においては「護国」「防邪」は「公事」であり、公事を全うする者は「生テ勤王ノ忠臣トナリ」「死テ往生成仏」して「現当二世利益」を得ると「真俗二諦」的な枠組みが提示された。そして、この主張の背景には「皇国」の危機に際して真宗門徒を動員したいという、長州藩側の要求も関わっていたことを史料によって検証した。それは近代移行期にあった真宗教学が、為政者側の要請と教団側の護法意識が複雑に交錯する中で展開していたことを示唆するものではなかろうか。また『仏法護国論』が出版された頃から、学林では「真俗二諦」の宗風を以って護法を行うべきという達書を本山に提出し、キリスト教研究に着手するなど、護法の動きが活発化していくが、これも本書の影響が大きかったことを指摘した。

第四章　月性の「護法意見封事」と『仏法護国論』

従来の研究においては、安政三年（一八五六）に月性が西本願寺第二十世の広如に提出した建白書「護法意見封事」と、月性の没後に出版された『仏法護国論』は同一のものといわれてきた。しかし筆者が行った史料調査によって建白書「護法意見封事」の写本が見つかったことから、両者には相違点があることがわかり、その違いを明らかにした。

その結果、月性が記した「護法意見封事」には存するが、月性の没後に出版された『仏法護国論』においては、大きく削除されていた箇所が四つあり、改編されて文意が大きく変えられていた箇所が二つあることがわかった。そこには仏教界ならびに西本願寺の現状を批判して教団改革を主張した部分、長州藩との密接な関わりを示す部分などが含まれていた。すなわち月性が「護法意見封事」を広如に呈した目的は、排仏思想が横行し、キリスト教が流入する中で西本願寺はいかなる対策をとるべきか、その具体的方法を示すことにあった。そして月性が「護法」のために必要だと考えたのは、まず「自己」の在り方を改革することにあった。その後まもなく月性は没したが、彼の門弟であった大洲鉄然は教団改革を主唱するようになり、明治維新後には島地黙雷や赤松連城といった長州藩出身の僧侶らとともに本山改革へと動き出した。かくして、彼らは坊官制などの教団の封建的身分制を廃し、近代の西本願寺教団の礎を築いていくこととなるが、彼らの行動に大きな影響を及ぼしたのは月性の「護法意見封事」における教団改革思想にあったことを明らかにした。

第五章　真宗の護法思想と真俗二諦の形成過程

本章では、「真俗二諦」思想の形成過程に、護法思想がどのように関わっていたのかを検討し、近代真宗教学の成立の背景を検証した。

まず幕末維新期の西本願寺門主消息にみられる「真俗二諦」思想の形成過程を検討し、その思想の源流とされる性海の『真俗二諦十五門』を取り上げた。これまでは性海が「王法為本」の「掟」として示されていた世俗倫理への対応を真俗二諦の「教義」へと展開させた背景について、近世後期には国学者などからの排仏論が激化し、仏教の非国益性が激しく非難されたため、世俗法を教義体系の中に取り込んだ真俗二諦説が提唱されるようになったと指摘されてきた。しかし、筆者は別の側面にも注目した。徳川幕藩体制が崩壊し始めた文化・文政期においては次第に法度政治に支障をきたすようになっていくが、西本願寺では三業惑乱を契機として法度（掟）を守らない僧侶が増加の一途をたどっていた。また当時の教団は三業惑乱の処理、興正寺との本末に関する訴訟、御影堂の修復などに多額の費用を要したため、その財政危機は頂点に達していた。このため門末が一丸となって返済にあたらねばならず、教団体制を一層強化す

る必要があった。しかし幕藩体制が崩壊へと向かい、本山の権威も低下する中で教団体制を強化するためには、従来のように「王法為本」の「掟」を強調するだけでは、もはや門末を統制できない状況にあったと考えられる。このような中で教団を立て直そうとする護法意識から「真俗二諦」の教義によって、より俗諦優先の思想が説かれるようになったのではないかと指摘した。

すなわち幕末維新期における「真俗二諦」の形成過程には、教団が内外に抱える多くの危機と教団体制を護持しようとする護法思想が複雑に関わっていたと考えられる。

結　論

以上、本論文を通して、近世から近代への転換期にあった真宗教学が、キリスト教をはじめとする多くの「他者」との出会いを通して、どのように転回していったのか、当時の教団が内外に抱える危機と護法思想との関係に着目しながら、幕末維新期の真宗教学史の多様な側面を明らかにした。また、そこに超然や月性の思想がどのように関わっていたのかを分析した。

超然や月性にとってキリスト教とは国家を乱す「邪教」であり、そこに排斥すべき理由を見出していたため、真宗教学の立場からキリスト教の教理を批判するというような比較思想的な側面は、幕末維新期の排耶論には未だ見いだせなかった。しかし、一方で幕末期におけるキリスト教や西洋科学といった「他者」との出会いは、真宗僧の学びの在り方に変化をもたらしている点にも注目したい。従来の学林においては、親鸞の教えを中心に宗乗・余乗を学んでいたが、護法への対応を検討する中で、外学の講義を行うようになり、明治元年（一八六八）には、学林に破邪学（キリスト教）や暦学、国学や儒学などを学ぶ外学科が新設された。すなわち長らく「鎖国」という状況下にあり、徳川幕府の宗教政策によって安定的な地位を保ってきた仏教にとって、幕末における「他者」との出会いは「自己」の在り方に転回をもたらす契機でもあった。その後、明治中期の井上円了の『真理金針』などの排耶論に至ると比較宗教学的な視点も見られるようになり、仏教者の「自他認識」は近世から近代へと移行する中で大きく転回していくことになる。その「自他認識の転回」過程を分析することは、仏教の近代化への道程を解明することにつながると筆者は考える。

真宗教学史のみならず他の諸分野においても、幕末維新期の仏教の護法思想を主題とする総合的研究は殆ど行われていないことから、本論文は当該領域を開拓する上でその一歩を踏み出したといえよう。しかし、幕末維新期の真宗教学史の本格的な研究は今後の課題でもある。近世から近代への転換期における真宗教学の動向をさらに検証し、研究の更新と方法論の確立に努め、真宗学の発展に寄与したいと考える。